身体を売って借金返済　～人体バラ売りオークション～

n e l e n e l e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
身体を売って借金返済　～人体バラ売りオークション～

【Ｎコード】
Ｎ４１６２ＨＪ

【作者名】
ｎｅｌｅｎｅｌｅ

【あらすじ】
借金返済のため、身体を（物理的に）売らされる事になった女の子のお話です
※この作品は以前ｐｉｘｉｖに投稿したものと同じ内容になります

第一話　右乳房のオークション

私は今、数十人の男たちが見ているステージの上で、全裸で拘束されてしまっている。積もり積もった借金を期日までに返せなかった私は、怖い人達に捕まってしまい、身体で返済させられることになってしまったのだ。

マイクを持った司会らしき男が現れた。これから私は会場の男たちに寄ってたかって犯されてしまうのだろう。だがそれで借金を返せるのなら仕方ないかと、半ば諦めの混ざった心境で司会の言葉を待つ。

「お集まりの皆様、たいへんお待たせいたしました！只今より豊子ちゃん２２歳のオークションを開催いたします！」

（……えっ？オークションってどういう事？身体を売るって人身売買で奴隷になっちゃうって事なの？）

予想外の事態に混乱している私をよそに、司会の声は続く。

「最初の商品は右乳房です。２２歳のみずみずしいＥカップおっぱい、５０万円からスタートです！」

「５５万」「６０万」「７０万」「８０万」「１００万！」

あまりに突然の展開に理解が追いつかない私を置いて、オークションはどんどん進んでいく。

「……他の方は居ないようですので、右乳房は１００万円で落札となります！」

私のおっぱいが１００万円で落札とはどういう事だろうか、パイズリすればいいのか等と考えている私の前に、スタッフらしき人物が現れた。そのスタッフが持っていた大きな包丁を見て、最悪の展開が頭をよぎる。

「あ、あの……右乳房を落札ってどういう事ですか……まさかその包丁で切るとかじゃないですよね……？」

「ええ、その通りですよ。あなたのおっぱいは今から切り取られて、落札者様の物になります」

「そんな……嫌……私のおっぱい取らないでください……」

「そういう訳にはいきませんねぇ、あなたも同意書にサインしたじゃないですか。借金を返済するまで自分の一部を切り離して売っていきますって」

怖い人達に無理やりサインさせられたあの同意書、そんな内容だったんだ。身体を売るとは聞いていたけど、まさかエッチな意味じゃなくて物理的な意味だなんて思いもしなかった。

包丁を持ったスタッフが近寄ってくる、本気で私のおっぱいを切り落とすつもりだろう。私は拘束された状態でも可能な限り身体を左右に振り、必死に抵抗の意を示す。しかしそんな抵抗も下乳の根本に当てられた包丁の冷たさを感じた瞬間にできなくなってしまった。恐怖に硬直する私に構わず、作業は続けられていく。スタッフは私の右おっぱいを鷲掴みにし、根本に当てた包丁を侵入させて切断し

ていった。

「いぎゃぁぁっ！やめてぇぇ！私のおっぱい切らないでぇぇ！！」

身体を切られていくとてつもない痛みと、おっぱいを失ってしまう恐怖に泣き叫ぶ私に一切構うこと無く作業は進められ、ついに私の右乳房は完全に切断されてしまった。

スタッフは鷲掴みにしていた私の右乳房を乳首をつまむ持ち方に持ち替えて、観客に見せつけるように高々と掲げた。乳首をつままれ、切断面から血を滴らせてブラブラと揺れる私のおっぱいだったモノ。数分前までは自分の身体にくっついていた筈のおっぱいが、今は切り離されて見せ物にされているという信じられない状況だけれども、右胸に感じる熱さと激痛がそれが現実だと私に伝えてくる。

(私のおっぱい……本当になくなっちゃったんだ……)

喪失感にすすり泣く私の元に新たなスタッフが現れ、胸の傷口に薬を塗っていく。傷口を直接触られる痛みに一瞬震えたが、薬の効果なのか激痛も出血も不思議とすぐに治まっていった。

ステージの方では落札者に手渡すために、おっぱいの箱詰め作業が進められていた。２０年以上ずっと一緒で、これからも死ぬまで一緒だと思っていたおっぱいとの突然のお別れに、せめて最後の光景を目に焼き付けようと私は箱詰め作業を凝視する。

(私のおっぱい、これで見納めなんて……ごめんね、さようなら……)

血を抜かれて少し青白くなったおっぱいが箱に入れられ、蓋が閉められるまでの数秒間の光景は、一生忘れることが出来ないだろう。

「豊子ちゃんの右乳房は今夜のディナーになるそうですよ。１人の女の子から２つしか取れない貴重なおっぱい、たっぷりと味わってくださいね！」

落札者に私のおっぱいを手渡した司会は、聞いてもいないのにその使い道を宣言した。その言葉に私は、自分のおっぱいがこんがりと焼かれて、ステーキのようにナイフで切り分けられて食べられる光景を想像してしまい、また涙が溢れてきた。

「では次の商品にいきましょう！豊子ちゃんの左乳房、同じく５０万円からスタートです！」

（そうだ、まだ借金は９００万も残ってるんだった……私、どこまで切り取られちゃうんだろう……）

司会が次のオークションの始まりを告げる声を聞きながら、私は自分の末路を想像して深い絶望に沈んでいった。

第二話　左乳房のオークション

（あれ、落札金額の宣言が聞こえない……）

左乳房のオークションが始まって少し経った頃、右乳房のときとは全然違う雰囲気に違和感を感じた私は、キョロキョロと会場を見渡した。会場の男たちはみんな私を見ているが、誰も声を発しようとしていないのだ。そんな私の動きに気付いたのか、司会の男が私に近寄ってきた。

「豊子ちゃん、お客様に左乳房の魅力をアピールしたらいかがです？高額で落札してもらえばその分早く借金が返せますし、失う部位も少なくて済むんですよ？ほら、お客様も待っています」

司会が私の耳元でささやく。男たちが静かだったのは私の言葉を待っていたからだったらしい。

（高く買ってもらうために自分の身体をアピールする……？これから切り取られてしまうというのに？そんな事出来るわけ無いじゃない！）

もしかして落札されなければ私のおっぱいは切り取られずに済むのではないか、そんな事を思いついた私は沈黙を続けた。

「おや、出来ないんですか？先に言っておきますけど、落札されなかった部位は切り取った後にこちらで処分する形になりますよ。このオークションは、女性が身体を切り取られて泣き叫ぶ様子を楽しんで頂くという目的もありますので、切り取らない事はありえませ

ん」

「えっ、そんな……なんて残酷な……」

「ここに連れてこられた時点で、あなたには身体をバラ売りして借金を返済するか、借金を返せずにバラバラに切り分けられて死ぬかの二択しか残されてないのです。乳房の次は女性器、その次は手足、更にその次は顔のパーツと順番に販売していって、それでも足りなければ最後に内臓です」

「内臓まで取られちゃったら本当に死んじゃう……」

「ええそうです、死にたくないなら頑張ってアピールしてくださいね」

身体の一部を切り取ってもらうように自分でお願いするなんて冗談じゃないけれど、このままだと私のおっぱいはただ無意味に切り取られてしまう。借金を減らせずにズルズルと身体だけが減っていき、最後には死んでしまうなんて結末は絶対に嫌だ。

「私のおっぱい……買ってください……死にたくないんです………」

私は震える声をなんとか絞り出し、自分の大切な一部を落札してもらうように嘆願する。

「55万」「……60万」

私の声を待っていたかのように男たちの一部から落札金額の宣言が聞こえてくる。でも、一回目のときほどの勢いは無く、金額だって

全然低ぃ。

「元気ないですねぇ豊子ちゃん、そんなんじゃお客様は満足してくれませんよ？もっと元気よく、笑顔で、えっちにお願いしないと」

司会からのヤジが飛ぶ。自分の身体をより高く買って欲しいなら、もっと男たちに媚びろと言っているのだ。

とてつもなく悪趣味なショーで嫌悪感に吐きそうになったが、私が生き延びるためには従うしかもう道はない。

「うぅ……私のおっぱい、買ってくださいっ！男の人が好きな、おっきなおっぱいですよっ！！」

「70万」「80万」「90万」「100万」「110万！」

恐怖と絶望に支配された表情筋を無理やり動かして、引き攣った笑顔で私は叫ぶ。その叫びに比例するかのように会場も盛り上がっていき、落札金額は右のおっぱいを超えた。

（もっと、もっとアピールしないとっ……）

私は拘束された身体をゆさゆさと揺らし、プルンプルンと揺れるおっぱいを男たちに見せつける。一切揺れない右胸の感覚がすでにおっぱいを片方失っている現実を突きつけてくるが、その悲しみを押し殺してアピールを続ける。

「こんなに大きいのにハリがある揺れ方でしょう！肌も白いし、乳首だって綺麗なピンク色です！ずっと丁寧にケアをしてきた自慢のおっぱいですよ！！」

胸が膨らみはじめた頃からちゃんとサイズの合ったブラジャーを着け、成長に合わせて細かくブラジャーのサイズも変え、丁寧に育ててきた私のおっぱい。うつ伏せの時に邪魔だったり、重くて肩がこったりもしたけれども、いらないなんて思ったことは一度もない自慢の大きなおっぱい。
そんなおっぱいを自分で差し出してしまっているという事実に、私は頭がおかしくなりそうだった。

「130万！！」「150万！！！」

「はい！決定いたしましたっ！豊子ちゃんの左乳房、150万円での落札です！！」

司会がオークションの終了を告げる。包丁を持ったスタッフが現れ、右おっぱいの時と同じように下乳側に包丁が当てられる。とても切れ味の良い包丁はいとも容易く私の身体を切り裂き、私のおっぱいと身体が繋がっている面積をどんどん減らしていく。
最後に残った皮膚もプツンッと断ち切られ、あっという間に私のおっぱいは身体から取り外されてしまった。傷口には右おっぱいの時と同じように止血と痛み止めの薬が塗り込まれる。

「私のおっぱい……返してください……今ならまだくっつくはずだから…………」

精一杯の嘆願が聞き入れられるはずもなく、私のおっぱいは目の前で加工されていく。私のおっぱいは切り口側に注射が打ち込まれた後、木製の台座の上に貼り付けられてしまった。

「おっぱいを壁にかけて飾れるようにしたいとの要望でしたので、

ハンティングトロフィーを参考に加工させていただきました。表には出回っていない特殊な保存薬で防腐処理を施しているので、剥製とは違っておっぱいの柔らかさは残ったままですよ」

司会は加工についての説明をしながら、落札者に私のおっぱいだったモノを手渡した。落札者は手渡されたおっぱいを揉みしだき、その柔らかさに満足そうに笑う。

（私のおっぱい、これからはずっとあの人の家に飾られてしまうんだ……）

22年間ずっと一緒で、大切に育ててきた私のおっぱいは左右合わせて250万円と引き換えに奪われてしまった。

右のおっぱいは食材として今夜食べられてしまい、左のおっぱいは飾られて晒し者にされ続ける。どっちの末路がマシだろうかなんて考えてしまうのは現実逃避にしかならないのだろう。

借金は残り750万円、地獄の時間はまだまだ終わらない……

第三話　女性器のオークション

「続いての商品は皆様お待ちかねの生殖器です！大陰唇から膣の奥までという、豊子ちゃんの身体で一番えっちな部位、俗に言うおまんこを丸ごとくり抜いてしまいましょう！！」

次のオークションが始まってしまった。性的な行為に直結する部位だからなのか、司会のテンションもひときわ高くて、会場も非常に盛り上がっているみたいだ。

「まずはおまんこがよく見えるように体勢を変えましょう、ついでに邪魔な毛も全部剃ってあげますね」

司会の声と共にスタッフたちが拘束用の台を変形させ、私はM字に脚を開いたような体勢にさせられる。更にスタッフたちは腰や脚の付け根部分に拘束具を追加し、私の下半身をガチガチに固定していく。今の私は大勢の男の前でおまんこを見せつけるというとても恥ずかしくて屈辱的なポーズを取らされているけれども、おっぱいを切断された直後でもうすぐおまんこも切り取られてしまうという状況に、そんな羞恥を気にする余裕なんてあるわけもなかった。

スタッフが剃刀で私の陰毛を剃り始める。ゾリゾリと乱暴に剃られるのかと思っていたら、意外にもちゃんとシェービングクリームを使って丁寧に剃っている。よく考えれば、大事な商品なのだから丁寧に扱われるのも当然なのだけれども、それは同時に私のおまんこがただのモノとして見られている事を意味していて、私は無性に悲しくなってしまう。

「お毛々の処理が終わったようです！これは……割れ目がぴったり閉じていて、ビラビラのはみ出しも無い綺麗なおまんこですねぇ。高額落札が期待されます！それでは皆様大変お待たせいたしました！飾って良し、食べて良し、そしてもちろんオナホールにしても良しの綺麗でえっちなおまんこ、１００万円からスタートです！！」

司会はおまんこの使い道を好き勝手に言いながら、オークションの開始を宣言する。しかし会場の男たちは私のアピールを待っているようで、落札金額は聞こえてこない。

「私のおまんこ買ってください！処女……じゃ無いけどセックスの経験は数回しか無いし、オナニーだってクリトリスばっかり使ってました！挿入経験の殆どない私の綺麗なおまんこ、締まりもキツくてちゃんと気持ちいいと思います！！」

「１２０万」「１５０万」

私はヤケになったように、セックスの経験もオナニーのやり方も何もかもをカミングアウトする。でも言葉だけのアピールでは物足りないらしく、男たちの反応は芳しくない。

（もっとアピールしないとっ……手が使えればいいのに…………あれっ？）

そんな私の気持ちを察したらしく、両腕の拘束が外された。私は自由になった両手で割れ目をくぱぁと割り開き、おまんこの中身を男たちに見せつける。

「見てください……私のおまんこ、綺麗なピンク色でしょう！……ひぐっ……ビラビラの形だって整っていますし、黒ずみもありませ

ん！……うぅ、ぐすっ……膣口だってほら、すごく小さくて狭くて気持ちよさそうだと思いませんか！？」

自分の身体を切り取って買って貰うように頼み込むという異常さ、でもそうしなければ最後には死んでしまうという恐怖、それらが混ざりあってグチャグチャになった感情のままに、私は泣きながら自分のおまんこをアピールし続ける。
私の指はアピールの言葉に合わせておまんこの各部位を紹介するように、大陰唇を拡げ、小陰唇を引っ張り、膣口をかき回す。こんな状況で気持ち良くなれる訳は無いけれど、私は自分のおまんこを触ったり触られたりする感覚を脳に焼き付けるかのように必死に指を動かし続ける。だってもうすぐ私のおまんこは切り取られて、もう二度と触れなくなってしまうのだから……

「180万」「200万」「220万」「250万！」

私のオナニーまがいの行為を見て、会場の熱気も高まっていく。もっともっと高く買ってもらえるようにアピールをするため、私はクリトリスに指を伸ばす。私の身体の中で最も敏感な性感帯は恐怖と生存本能のせいか、これまでの人生の中で一番大きく、固く勃ち上がっていた。

「このクリトリスも大粒で、すごくえっちな形をしてるんです！いつもクリオナばっかりしていたから、こんなに大きく育っちゃいました！」

「280万！」「300万！！」

包皮をめくり、むき出しになったクリトリスをグリグリとこね回しながら、言葉を紡ぐ。クリトリスを直接、それも力の限りこね回す

なんて普通なら激痛しか感じない行為だけど、極限状態の私はその痛みを快感に錯覚し始めていた。

「んぅっ……もっと、もっともっと高く買ってください！いつも私のことを気持ち良くしてくれていた、大切なクリトリスとおまんこっ………あぁんっ……なんでっ？こんな状況なのに気持ちいいのっ……！？あ、あぁぁぁっっっ！！！」

「３５０万！！！」

イッた、間違いなくイッた。
おっぱいを切断されたばかりで、これからおまんこも切り取られてしまうという状況で、激痛としか感じない力任せの刺激で、それなのに私は絶頂に達してしまった。
今までのオナニーで感じていた性感とは全く比べ物にならない、気持ち良さなんて一切存在しない暴力そのものな刺激による強引なオーガズム。私の人生最後の絶頂は、優しさや気持ち良さの欠片もないただただ暴力的な物になってしまったのだった……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「いやぁ、素晴らしいオナニーショーでしたね。人生最後の絶頂に震える姿、とてもエッチで私も興奮してしまいましたよ。それでは他の方はいらっしゃらないようですので、豊子ちゃんのおまんこは３５０万でお買い上げになります！！」

勝手なことを言いながら、司会がオークションの終了を告げる。頭ではさっきのが人生最後の絶頂になると理解していたつもりだったけど、他人から言われてしまうと耐えられないほどの悲しみが襲ってくる。

スタッフが近づき、私の両腕を再び拘束する。その後、スタッフは刃渡りの長い細身のナイフを取り出し、おっぱいを切断した時に使った止血用の薬をナイフに塗り始めた。着々と準備が進められている光景が、私のおまんこが本当にこれからくり抜かれてしまうという実感を強くしていく。

「落札者さん……私を丸ごと買って、あなたの性奴隷にさせてください……いつでもお側に付いて、好きな時におまんこを差し出させて頂きますし、精一杯ご奉仕します……」

ほんの僅かな可能性にかけて、私は落札者に話しかける。身体をバラバラに切り取られてしまうくらいなら、奴隷になっても自分のパーツがちゃんと正しい位置に繋がっている方が良い。

「おまんこだって……切り取ってオナホにするよりも、ちゃんと身体に繋がってる方が気持ちいいと思います……あったかいですし、ちゃんと締め付けておちんちんを気持ち良くもします……おっぱいはもう無いですけど、それ以上に口とか手とかでもご奉仕いたしますので……」

精一杯の笑顔を作り、落札者に媚を売る。しかし落札者はそんな私の声に一切反応を返すこと無く、ニヤニヤとした笑みを浮かべて、これから自分の物になる予定のおまんこを見つめるだけだった。

股間にチクッっとした痛みを感じ、目線を落札者から私のおまんこに向ける。痛みがした時点でわかってはいたけれど、私の割れ目部分の少し上の位置に、ナイフが突きつけられていた。

「うぐっ……痛っ！　いやぁ…………やめてぇぇぇっ！！」

ズブズブ、グリグリとナイフが私の股間に突き立てられる。ナイフに塗られていた薬のお陰で、身体を切り分けられる痛み自体はそこまで強くはないけれども、その分ナイフがおまんこをザクザクと切り進む感覚が感じられてしまう。

「やだぁぁぁっ！　私のおまんこ取らないでぇぇぇぇぇっ！！」

唯一動かせる頭をブンブンと振り回して泣き叫んでも、ガチガチに拘束された身体はピクリとも動かせず、ナイフの動きも止まらない。

「豊子ちゃん、あんまり暴れすぎないほうがいいですよ。膀胱とか腸とか肛門とかが傷ついて、一生まともにおトイレが出来ない身体になっちゃうのは嫌でしょう？　それに膣が破けたりした場合も、買取金額が安くなってしまいますので」

司会のやんわりとした脅しを聞いて、私はピタリと動きを止めた。確かに他の器官を傷つけずに膣だけをくり抜くというのは、おっぱいを切断するよりもずっと繊細な作業だし、手元が狂った時の被害も比べ物にならない。

（うぅ……おまんこ切られてるのがはっきりわかる……身体を切られる感覚ってやっぱり気持ち悪い……）

ナイフは慎重かつ丁寧な動きで、私の大切な所を蹂躙する。大陰唇

の外側に沿って肉を切り裂きながら半周し、おまんことお尻の穴の間である会陰部分まで到達したところで、ナイフは一旦引き抜かれた。ナイフの通った切り口からはちらりと赤い肉が覗いており、その様子は股間に二つ目の割れ目が出来てしまったようにも感じられた。

そしてナイフには薬が塗り直され、一回目と同じように大陰唇に沿って反対側を半周する。反対側も会陰まで切り進んでナイフを抜くと、スタッフは私のおまんこの下にトレーを設置した。

唐突に設置されたトレーを疑問に思っていると、私の股間に変化が訪れた。

周囲をすべて切断され、支えを失った私のおまんこが、重力に負けてズルズルと滑り出し始めたのだった。

「嫌……抜けちゃうっ！おまんこ抜けちゃうっ！駄目だめだめやめてぇぇぇ！おまんこ止まってぇぇぇぇぇ！！！」

あまりにもショッキングな事態に私は恐怖と拒絶の声を上げてしまう。私の目には股の間から伸びるようにせり出してくる赤い肉が見え、お尻にはその肉が当たるベチョッとした感触を感じる。

滑り落ちるおまんこを止めたくて膣を必死に締めようと力を入れても、そもそも締めるべき膣自体が抜け落ちているのだからなんの意味もない。

ゆっくりと股間から滑り落ちていく私のおまんこは、最後には粘着質な音を立ててトレーに落下した。

ベチャンッ！！

（あぁ……私のおまんこ、全部抜けちゃった……なんかお股がスースーする………もう私、セックスどころかオナニーも出来なくな

っちゃった……）

実際に身体から切り離されてしまったおまんこを見て、私の喪失感はもっともっと強くなる。しかしそんな私の感傷に構うこと無く、トレーに落ちたおまんこはスタッフによって回収されて、左のおっぱいと同じように保存薬が打ち込まれた。

「段々と滑り落ちるおまんこ、出産してるみたいでとてもえっちで素敵でしたよ。オナニーショーの次はおまんこ本体の出産ショーをしてくれるなんて、豊子ちゃんは私達を楽しませてくれますねぇ。」

私を煽るようにさっきの光景についての感想を言いながら、司会は私のおまんこを受け取る。

「豊子ちゃんのおまんこはリアルなオナホールとして使いたいとのことでしたので、保存薬を打ち込むだけの最低限の加工にさせて頂きました。色、形、柔らかさ、どれをとっても非常に上質で素敵なオナホールになってますのでお楽しみ頂けるかと思います。あ、もし落札者様が今すぐに使いたいということなら、トイレでお願いしますね」

プニプニと大陰唇をつまんだり、割れ目を拡げたり、膣を握りしめたりとおまんこを一通り弄び品評までした司会は、下品なジョークで会場の笑いを取りながら私のおまんこを落札者に手渡した。

私のおまんこはこれから何度も、下手をしたらそれこそ毎日のようにあの男に犯されてしまうのだろうか。私の大切な部分がただのモノ、それもオナホールとして扱われてしまう事を想像すると、悲しみと罪悪感が溢れてくる。

（ごめんね、私のおまんこ……オナホになっちゃうなんて嫌だよね……ごめんなさい、情けない持ち主の私を許してください……）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ここで一度、お客様の休憩時間を設けます。その間、豊子ちゃんには自分の身体が今どうなってるかを鏡で見せてあげます。両腕も解放してあげるので触って確かめてもいいですよ」

司会の言葉と共に目の前に運ばれてきた鏡に映し出されたのは、変わり果ててしまった私の身体だった。腕の拘束も外された私は、自分の身体の惨状を詳しく確認する。

自慢だったおっぱいは跡形も無くなり、平坦になった胸板に丸い傷口が見えるだけ。身体をゆさゆさと揺らしてみても、いつもみたいにおっぱいが揺れる感覚はもう返ってこない。
胸に手を当ててみても、おっぱいのぽよんとした柔らかい感触は一切存在せず、ただペタンとした胸板の感触が手に残るだけだった。

（私のおっぱい……もう両方とも無いんだよね…………乳首も付いてないこんなまな板が私の胸だなんて……）

股間を見ると、女性であれば誰しもに付いているはずの割れ目は無く、そのかわりにポッカリと大きな穴が空いてしまっていた。穴を閉じようと下腹部に力を込めてみたけど、生殖器をまるごとくり抜

かれているせいで穴はピクリとも動かない。
オナニーをするときのように股間に手を当てても、割れ目に指が挟まれたり粘膜に触れたりといった慣れ親しんだ感覚は何もなく、ただ空洞が広がっているだけ。指を少し上に動かしてクリトリスを刺激しようとしても、虚しく空振りし続けるだけで気持ち良くもなんともなかった。

（私のおまんこ、本当にただの穴になっちゃった……これから一生開きっぱなしなんだ………それにもう気持ちいい事が出来ないなんて酷すぎる……）

更にその奥にはリング状にぷっくりと膨れたピンク色の肉、子宮口が見える。そう、女性の象徴をほとんど切り取られてしまった私にも、まだ女として最も大切な臓器が残っている。おっぱいもおまんこも失ってしまった身体だけど、それでも、子宮と卵巣さえあればまだ私は女だと言えるのかもしれない。

借金は残り４００万円、折り返し地点は超えたけれど、私はあとどれだけ身体を失えばいいのだろうか……

第四話　子宮と卵巣のオークション

「それでは休憩も終わりましたので次の商品、子宮と卵巣にまいります！女の子の身体で一番大切な、赤ちゃんのお部屋を購入するのは誰になるのでしょうか！！」

子宮と卵巣さえあれば私はギリギリ女でいられる、そんな微かな希望をも打ち砕くように、私の<女>を完全に終わらせる宣言が会場に響き渡った。

おっぱいもおまんこも失った私はもう、周りから女として見られることは無いのだろう。たとえ子供だけは作れる身体だとしても、セックスも出来ない相手と付き合って、更には結婚してくれる男性なんて存在する訳が無いのは分かっている。本来の目的で使う機会が失われ、ただ生理の苦しみだけを与えてくるだけの子宮なんて、いっそ無い方が楽になるのかもしれない。
それでも私の感情は、自分が女でいることを諦めることなんて出来なかった。

「嫌だ……やめてください……そこは、そこだけは取らないで下さい…………完全に女の子じゃなくなっちゃうなんてイヤ……」

司会と会場の男たちに向け、私は弱々しい声で命乞いならぬ子宮乞いをする。
子宮を残すための方法を必死で考え続けた私の頭に、先に別の部位を売って残り４００万円の借金を返済するという手段が思い浮かぶ。

「そうだっ！足っ、足を先にオークションに出します！大して運動

もしていないからお肉も柔らかくて美味しそうだと思いませんか！？もちろん両足とも売ります！！だから子宮と卵巣だけは取らないで下さい！！！」

どこなら残りの借金を返せる値段で売れそうか、失ってもどうにか生きていくことが出来るかを考えた私の結論は、両足を諦めることだった。歩いたり走ったりは出来なくなるけれど、車椅子みたいな手段もあるし、不便ではあっても日常生活を送ることは出来るはずだ。

眼球や舌みたいな顔のパーツはサイズが小さく４００万円には届かなそうな上、特に視力を失ってしまう不便さは両足を失うよりも大きいと思う。両腕だったら金額はクリアできるかもしれないが、やはり失った後の不便さが足とは比べ物にならない。内臓なんて取られたら死んでしまう、腎臓と肺は２つあるけどそれ片方だけで４００万に届くわけがない。

今後の不便さとかを考えるのなら、＜女＞を諦めるのが一番良いという理屈からはあえて目を逸らし、私は自分の両足を差し出そうと声を張り上げる。

「私の足、太ってるわけじゃないけど程よくお肉が付いていて柔らかいので、太ももで膝枕を作れば気持ち良いと思います！もちろん食べていただいても美味しいはずです！！だから、だからっ、子宮じゃなくてこっちを買ってくださいぃぃぃ！！！」

「豊子ちゃ～ん、そこまでにしましょうねぇ。あんまりワガママ言ってると、借金返済とか関係なく全身バラバラにしちゃいますよ？」

「ひぃっ……その……ごめんなさいごめんなさい……」

そんな私の狂気的な勢いも、司会の脅しによって一瞬にして静かにさせられる。そうだった、ここでは私を生かすも殺すも、全部司会とオークション運営のさじ加減でしか無い。今の私は、指定された部位の金額がなるべく高くなるように、精一杯アピールをするしか無いのだ。

「まぁどうしても女の子でいたいと言うなら、考えてあげなくもありません。そうですね……手足４本全部のセット販売、それならば子宮と卵巣より先にオークションをしてあげてもいいですよ。もちろんそれで４００万円を売り上げたなら、それ以上は切り取ったりしません、約束します」

「手足全部……もう何も出来なくなっちゃう……」

「足だけで済まそうなんて許しませんよ？　こちらの予定を捻じ曲げたいのなら、それ相応の代償を払ってもらいます。ダルマになる覚悟があるのなら、豊子ちゃんの女の子は助けてあげてもいいでしょう」

子宮と卵巣を残すために突きつけられた条件は、手足全部の切断という途轍もなく重い物だった。
手足を全て失い、ダルマ女となった私の姿を想像する。短くなった手足を無意味にピョコピョコと動かし、芋虫の様に這いずって移動する私。自力では食事すらまともに取れず、ひょっとすると野垂れ死んでしまうかもしれない。
借金を返済すれば全部終わりではなく、そこから先も私の人生は続いていく。ダルマ状態で惨めに生きていくことになるという恐怖は、私に＜女＞を捨てる決心をさせるのに十分だった。

「わかりました……子宮と卵巣は諦めます……だから、ダルマには

しないでください………」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「では気を取り直して、豊子ちゃんの子宮と卵巣のオークションを再開します！まずは皆様に実物をお見せいたしましょう！」

左右のおっぱいやおまんこの時と同じく、解体担当のスタッフがやってきて私の両腕を拘束する。

スタッフはメスを取り出すと、刃に止血用の薬を塗ってから、私のおヘソの下辺りに突き立てた。

（ぐっ……お腹切られちゃってる……実物を見せるって言ってたし先に切り取っちゃうのかな……）

スタッフはおヘソの下を横一直線に切り裂き、切り開いた傷口に腕を突っ込んで私のお腹の中をまさぐり始める。

（あぐっ……おえぇっ……お腹の中かき回されてるのがわかっちゃう……気持ち悪いよぉ……）

私のお腹をまさぐっていた腕は、何かを握るような動きをした後、掴んだ物を引っ張り出すようにゆっくりと引き抜かれた。

「皆さんご覧ください！豊子ちゃんの子宮が出てきましたよぉ！左

右に付いている白い玉が卵巣、女の子のタマゴですね！ほら、豊子ちゃんも自分の子宮を見るなんて初めてでしょう？これで見納めですしちゃんと見てあげたらいかがです？」

「嘘……これが私の子宮なの……？戻して……お腹に戻してください……まだ間に合うから………」

「戻してあげる訳ないでしょう！それでは豊子ちゃんの子宮と卵巣、１００万円からスタートします！！」

お腹の奥が引っ張られる感覚とともに、傷口から私の子宮と卵巣が現れる。普通なら絶対に見えない、見えてはいけない物が見えているという光景は現実とは思えなかった。それでも子宮が握られているる感覚と、女の根幹が体外に露出してしまっているという恐怖、それによって全身に走る悪寒が、目の前の光景が紛れもない現実だと告げてくる。

子宮を戻してほしいと言う嘆願が聞き入れられるはずもなく、私の子宮と卵巣のオークションが始まってしまう。

「ほら豊子ちゃん、アピールアピール！若い女の子の子宮は貴重なんですから、高く売らないと損ですよ！」

アピールしろと言われても、自分の子宮を見るのは私だって初めてで、どこが良いのかなんて分からない。おっぱいやおまんこの時は、男を喜ばせるような媚びた言葉がなんとか出てきていたけど、子宮に関しては本当に何も浮かんでこなかった。

ただ呆然と自分のお腹から飛び出た子宮を見つめているだけの私に、司会の男が近寄ってくる。

「どうアピールすればいいか分からないんですか？まぁ初めてでし

ょうし仕方ないですね。手伝ってあげましょう」

司会はそう言って私の子宮を鷲掴みにし、グニグニと無遠慮に揉み始めた。

「やっぱり若い子の健康な子宮は良いですねぇ。ツヤもハリもあって揉み心地が素晴らしい！」

「１２０万」「１５０万」「１８０万！」

（ぐぅっ……私の子宮が揉まれてるのがわかる……絶対に乱暴に扱っちゃいけない、赤ちゃんを産むための大切な場所なのに……）

子宮を直接揉みしだかれるありえない感覚が私を襲う。その感覚はまさに＜女＞の根本を蹂躙するような暴力そのもので、私の自尊心は強烈に傷つけられていく。

「豊子ちゃんにも子宮についてインタビューしてみますね。豊子ちゃん、さっきセックスの経験自体はあるって言ってましたが、流石に妊娠の経験は無いですよね？」

「はい、無い……です…………うぅ……」

「では生セックスは？中に出されたりしましたか？」

「いいえ……ひぐっ……全部コンドームを使っていました……」

司会から飛んでくるデリカシーの欠片もない質問も、今の私には正直に答える以外の選択肢は存在しない。すすり泣き、震える声で回答した私の性経験は、どうやら観客たちを満足させるに足る内容だ

ったらしい。

「聞きましたか皆様！なんと豊子ちゃんの子宮は一度も精液を入れられたことのない、とっても綺麗な子宮みたいですよ！……まぁ豊子ちゃんとしては、一度も本来の使い方をすること無く売られてしまうってことなので、残念だとは思いますけどね」

「２００万」「２２０万」「２４０万！」

司会の言葉で私はハッとする。確かに私の子宮は毎月規則正しく血を流しているだけで、子供を宿すという使い方をしたことはなかった。いつか好きになった人と結婚して子供を産む、そんな女性としてのありふれた願望ももう二度と叶わなくなるという事実に、私の心は暗くなっていく。

「次は勿論こっちも見ていきましょうか！子宮の左右にくっついた女の子の大切なタマゴ、こちらも健康的で綺麗な色をしていて素敵です！」

司会がついに私の卵巣に狙いを定める。女の器官の中でも間違いなく一番重要な物で、子宮ですらも敵わない程に私の＜女＞が詰まったふたつの卵が、衆目に晒されているというあまりの悍ましさに身体の震えが止まらなくなる。

「ちょっと触ってみましょうか。こうやって女の子の中枢をコリコリする感覚、色々と堪らないですねぇ……うーん、若いだけあって中身がずっしり詰まってる感じの上質な卵巣です！さぁお客様、いかがでしょうか！？」

「いっ……ぎゃぁっ！やめてぇぇ！！ホントに痛いのっ……！乱暴

にしないでっ……！！」
卵巣をコリコリと握られる痛みは異常なほどに激しく、おっぱいやおまんこを切り取られた時を含めても、間違いなく人生で一番の激痛だった。私の＜女＞そのものが上げる断末魔のような痛みに、私は悶絶する。
そんな私の叫び声で会場は更に盛り上がり、オークションの金額は釣り上がっていく。

「260万」「280万！」「300万！！」

「さぁ300万！他の方はいませんか！？……では、豊子ちゃんの子宮と卵巣は、300万円での落札となります！！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ザクッ……ザクッ……

お腹の中で、私の子宮と卵巣が身体から切り離される感覚が伝わる。
子宮を掴まれている感覚や、卵巣を握られた時の痛みは、一刀ごとに薄れていき、その分自分が＜女＞ではなくなってしまう絶望感がどんどん強くなっていく。

（子宮と卵巣が切り離されちゃってる……もう私、正真正銘女の子じゃなくなっちゃうんだ………）

ザクッ……ザクッ……ブツンッ！！

最後まで繋がっていた部分が切り離された瞬間、おっぱいやおまんこを失ったときよりも更に強烈な絶望感と喪失感が私に襲いかかった。

（あぁ……わかっちゃった……今私、完全に女の子じゃなくなっちゃったんだ…………うぅ……もう赤ちゃん産めないんだよね…………）

「皆様ご覧ください、ついに豊子ちゃんの子宮と卵巣の摘出が完了いたしました！こうやって見てもやっぱり綺麗ですねぇ、豊子ちゃんもそう思いませんか？」

私から抜き取られた子宮と卵巣は、摘出を行ったスタッフの手によって、会場全体から見えるように掲げられる。

司会からの問い掛けに答える余裕などあるはずもなく、私はただ晒し者にされた自分の子宮と卵巣を呆然と見つめ続けるだけだった。

「おや、反応無しですか豊子ちゃん、まぁ仕方ないですね。落札者様は子宮と卵巣の標本化をご希望でしたので、その様に加工させていただきます。そこで加工を待っている間、豊子ちゃんにはちょっとした余興をしてもらいましょう」

完全に去勢されて呆然としている私のそばに司会が近づき、右手の拘束を外して手首を掴む。私がされるがままなのを良いことに、司会は私の右手をお腹の傷口に持っていった。

「おまんこから子宮までを全部抜き取られた豊子ちゃんは、お腹か

らお股までトンネルが開通しているん状態なんですよね。傷口を閉じる前に、豊子ちゃんの腕を貫通させるのとか面白いと思いませんか？」

「えっ……なにそれ……頭おかしいんじゃないですか………？」

あまりに常軌を逸した行為の宣言に、私は思わず呟いてしまう。私の右手をお腹に突っ込もうとする司会の力に逆らうように、私は右腕に力を込めて抵抗する。

「ほーら、大人しくしてくださいよ。そんなに抵抗するなら右腕ちょん切ってからにしますよ？」

でも、そんな抵抗も司会の一言で出来なくなってしまう。私は司会の誘導に従う様に、自分のお腹の中に右腕を入れていく。

「豊子ちゃんの腕は細いからすんなり入っていきますねぇ、勿論おまんこがくり抜かれてるっていう理由もあるんですけど」

（どんどん入っちゃう……ありえない、気持ち悪いよ……）

自分の身体の中に腕を入れていく気持ち悪さだけでなく、子宮も膣も無くなってしまっているのが右腕の感覚ではっきりと分かってしまう。本当なら膣の粘膜があったはずの所まで腕が進んでいるのに、スカスカな穴があるだけで粘膜の感覚なんて全くしない。

「さぁ、ついにお股から右手が出てきます！皆様拍手でお出迎えください！豊子ちゃん、おまんこに続いて右手の出産、おめでとうございます！！」

ついに私のお股から右手が現れる。自分の股間から手首が生えている現実離れした光景と、わざわざ出産という単語を使った司会の煽りに、もはや乾いた笑いしか出来なくなってしまう。

（ホントに出てきちゃった……アハハ……これが出産なんて……おっかしい……もう私、赤ちゃん産めないのにね…………）

「引き抜く前に記念撮影しましょうか。豊子ちゃん、右手でピースしてくれませんか？あ、笑顔も忘れないでくださいね、ほらピースピース」

もう抵抗する気力なんて無く、言われるがままに右手でピースの形を作り、引き攣った笑顔を浮かべる。周囲からカシャカシャと聞こえるシャッター音は、この光景が永遠に残ってしまう事を意味していた。またひとつ、取り返しのつかない事が増えてしまった。

右腕をお腹から引き抜いた後、私はスタッフにお腹の穴を塞いでもらっていた。ぽっかり空いたおまんこの方は、かつて子宮口があった辺りで縫い閉じられ、お腹側は普通に傷跡を縫い閉じられる。糸はそのまま体内に吸収されるタイプのようで、抜糸の必要は無いとのことだった。ちなみに、右腕は前と同じ様に再度拘束されている。

「子宮と卵巣の加工が終わったみたいです！標本化と言うことで、容器の中に樹脂で固めさせて頂きました。勿論保存薬も打っているので保管の心配はございません」

司会が手に持っていたのは、ホルマリン漬けの標本に使われるような円筒形の容器だった。当然その中には私の子宮と卵巣だったモノが入れられている。ちょっと前までは私の物だった子宮はもう絶対に子供を宿すことはなく、卵巣は卵子を生み出す事もない。

私の＜女＞が完全に終わってしまった証拠を目の前に突きつけられ、
あまりに強烈な喪失感に気が遠くなっていく……

（私の子宮と卵巣……標本になっちゃった……もう絶対、元に戻らないんだ…………）

残りの借金は１００万円、次に失うのは手か、足か……
そんな事を考えながら、私は意識を手放した……

第五話　手足のオークション

「……ゃん……子ちゃん……起きてください、豊子ちゃん！」

ペチペチと頬を叩かれる感覚と、私の名前を呼ぶ声で起こされる。寝起きで頭がうまく回っていないが、なんだか私の<女>がぐちゃぐちゃに壊されるような、とてもひどい夢を見ていた気がする。

「あれ、ここ……どこ……？今のは……夢、だったの……？」

「おや？寝起きでボーっとしているんでしょうか。シャッキリしてください、まだオークションは終わってませんよ！」

ぼんやりとした意識で手足を動かそうとしてみたが、力を入れていても全然動かせない。どうやら今の私は大の字に寝かされて両手足を全て拘束されているようだった。

（なんで私拘束されてるんだっけ……？オークションって……あっ！！！）

頭が回り始めた私は、慌てて自分の胴体を確認する。
そこには今まで慣れ親しんできたおっぱいは存在せず、ただふたつの丸い傷跡が残っているだけ。おっぱいが無くなってよく見えるようになってしまったおへソの下には横に傷跡が走っているし、角度的に見えないけれどもお股にはやけにスースーする感覚がある。
今までのオークションが全部夢だったなんて都合のいい妄想は、目の前の光景によって粉々に打ち砕かれた。

（夢じゃなかった……うぅ……おっぱいも、子宮も、おまんこも、もう全部私には付いてないんだ……）

喪失感に絶望する私をよそに、司会がニコニコしながら、中央にルーレットの針が付いたボードを見せてくる。そのボードは中心から四等分されたスペースにそれぞれ右腕、左腕、右足、左足と書いてあり、なんとなくツイスターゲームで使う奴を思い出す見た目をしていた。

「豊子ちゃんもしっかり目覚めたようですし、オークションの続きを致しましょう。次の商品は手足ですが、４本の内どれになるかはこのルーレットで決めさせて頂きます！さっきも足なら売っていいって言ってましたし、足が出ると良いですね、豊子ちゃん」

そんな言葉と共に司会はルーレットの針を回す。クルクルと回る針を見つめながら、私はこれから失う羽目になる部位についてを考えてしまう。

確かに子宮を失うぐらいなら足のほうが良いとは言ったけど、あくまでそっちのほうがマシってだけで、足が要らないなんて事は一切無い。それでも腕とを天秤にかけて考えて、ルーレットで足が出ることを願っている私も確かに存在していた。

（この針がずっと止まらなければいいのに…………せめて右腕だけは出ないで……お願い……）

ありえない願いを抱きつつも、せめて利き腕だけは失いたくないと、私はルーレットに祈る。しかしそんな私の祈りを嘲笑うかの如く、ルーレットの針は右腕に止まってしまった。

「あぁ……そんな……よりにもよって右腕だなんて…………どうし

て……」

「はい、次の商品は右腕に決定しました！いきなり利き手が出てしまうなんて豊子ちゃんは運が悪いですねぇ。それでは豊子ちゃんの右腕、１００万円からスタートです！！」

あまりの運の悪さに嘆く私に構わず、私の右腕のオークションが始まってしまう。今までと同じく観客たちは私のアピールを待っているらしく、会場から金額の声は聞こえてこなかった。

「ほらほら、豊子ちゃん。ちゃんとアピールしてくださいよ！金額的にもこれが最後ですし、超過した分の売上は全部豊子ちゃんの物になるので頑張って盛り上げて下さい！」

「あぅ……私の右手、買ってください……うぅ……すらっとしてて柔らかい、女の子らしい綺麗な腕だと思います……」

「……１２０万」「１４０万」

司会に急かされるがままに、私は震える声で自分の腕の魅力をアピールする。でもこの程度では男たちは満足しないらしく、あまり金額は上がってこなかった。

「元気ないですねぇ、豊子ちゃん。そんなんじゃ良い金額は付きませんよ？そういえばその爪、マニキュアが綺麗に塗られてますけどネイルとかお好きなんですか？」

「はい……ネイルには結構こだわっていて、いつも自分で塗っています……」

「そうだったんですね、とても上手ですよ。でも、これからはもう二度と自分じゃ塗れなくなっちゃうなんて残念ですねぇ」

司会と会話をするうちに、右腕を失ってしまう事の重大さが実感を伴って襲ってくる。

片腕を失うことで出来なくなってしまう行為や、大変になってしまう行為を具体的に想像し、私の心は深い絶望に囚われる。

（そっか、私もうネイルも出来ない身体になっちゃうんだ……それに、お箸使ったりとか字を書いたりとかも、左手だとすっごく大変だよね…………どうしよう……）

「１６０万」「１８０万！」「２００万！！」

私がショックで何も言えなくなっている間に、オークションは終わってしまう。私が絶望に囚われている姿は観客たちのお気に召したようで、結果的にオークションはとても盛り上がったみたいだった。

「他にいないようですので、豊子ちゃんの右腕は２００万円での落札となりました！豊子ちゃん、借金返済おめでとうございます！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

スタッフによって右腕の付け根、脇の下から５ｃｍくらいの所にサインペンで点線が書かれる。腕をグルっと一周するように書かれた

その線はあからさまな切り取り線であり、これから行われる腕の切断という行為を強く意識させせられてしまう。

恐怖に震える私をよそに、切断の準備は着々と進められていく。止血のために腕の根本をしっかりと縛り、切断の際に邪魔になりそうな右腕の下にある拘束台を抜き取り、切断をするための大きな鉈を取り出す。スタッフが取り出したその鉈は重量感に反して刃の部分が非常に鋭く研がれているようで、女の細腕なんていとも簡単に切断できるという確かな説得力を存分に発していた。

「さぁ、準備が整いましたので始めさせていただきます！切断マジックのような種も仕掛けもない、正真正銘の人体切断ショー、一瞬ですので皆様お見逃し無く！！！」

司会の声とともに鉈が振り上げられる。

私は右手を見つめながら、指をグーパーと動かし続ける。自分で思ったとおりに動く右手は、私の右腕がちゃんと繋がっている証拠なのだから。

（うん、動いてる……まだ大丈夫、大丈夫……）

ヒュンッという風切り音とともに鉈が振り下ろされ、そのまま下まで振り抜かれる。

（うっ！熱っ！！……あれ？右手が動いてない……動かしてるはずなのに…………あっ、あぁぁぁっっ！！！）

脱力したように手のひらを開いたまま一切動かなくなってしまった右手に、私は状況を理解してしまう。

「右手っ！私の右手っ！！切れちゃった、切れちゃったよぉ！！熱いっ、痛いっ！！！いやぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」

腕を切断された衝撃、そして右腕の付け根から感じる熱と痛みに私は叫ぶ。苦痛を少しでも紛らわせたくて全身をめちゃくちゃに暴れさせようとするが、拘束された身体で動かせる部位は皮肉にも、切断されたことによって拘束から解放された短い右腕だけだった。

スタッフは暴れ続ける短くなった右腕を掴み、傷口に止血薬を塗る。痛み止めも効いてきて少しだけ冷静になった私は、自分の右腕の状況を確認してしまう。

手首を縛られて拘束台に置かれたままの私の右腕は、指を動かそうとどんなに力を込めてもピクリとも動くことはない。腕全体を動かしてみても、肩から５ｃｍ程度のとても短くなった右腕がピョコピョコと動くだけ。すぐ近くにあるのに一切動かない右腕が、私の喪失感を掻き立てる。

「うぅ……私の右手、動かない……ぐすっ……動いてよ……お願い、動いてっ……！」

そんな願いが叶えられる事なんてあるはずもなく、切断された右腕の加工が進められる。手首の拘束を外されて持ち上げられた右腕は、指も手首も肘も全部の関節がダランと脱力していて、もはやそれがただの肉の塊になってしまった現実を私に突きつけてきた。

（やめて……私の右腕、持っていかないで…………そんなふうにただのモノみたいに扱わないで……）

右腕は今までと同じく保存薬を打ち込まれた後、切断面の部分を嵌め込む様にコップみたいな機械を取り付けられる。二の腕の半分く

らいまでを覆ったその機械は、鉛筆キャップのようにも見えた。
「豊子ちゃんの右腕はオモチャにしたいとのことでしたので、特殊な制御装置を取り付けさせて頂きました。この装置はＡＩで制御した電気刺激を流すことで、切り離した後の人体を自由に動かすことが出来るという、とてもハイテクなものなんです！音声認識なので軽く試してみましょうか、＜右腕ちゃん、まっすぐ手を伸ばして＞」

司会がそんな説明をして、私の右腕に声をかける。すると、ダランと脱力していたはずの私の右腕は、あっという間にバンザイをするかのごとく腕をピーンと伸ばしてしまう。
自分の腕だったモノが自分の意志とは関係なく動かされている気持ち悪さ、そして当たり前だけど動いている感覚が一切帰ってこない寂しさに、私の目からは涙がこぼれてくる。

「すごい技術でしょう？こんなことも出来るんですよ。＜右腕ちゃん、ジャンケンしましょう＞。じゃーん、けーん、ぽん！……負けちゃいました、右腕ちゃん強い！」

（うわぁ……人間みたいになめらかに動いてる……すごい…………って自分の腕なのに何考えてるの私！）

とてもスムーズな動作で私の右手はチョキを出す。その技術のあまりの凄さに、その右手が自分のだったという事も忘れてただ感心してしまい、すぐに我に返って自己嫌悪に襲われる。

「勿論手コキとか手マンみたいなえっちな動きも登録済みですので、夜のご奉仕をさせることも可能です。＜右腕ちゃん、手コキお願い＞。……ほら、若い女の子の柔らかいおててでシコシコしてもらうの、自分でやるより気持ちよさそうですよね。あ、ＡＩによって最

適な動きの速さや力加減に調整してくれるので、手コキの技術に関してはご安心ください！多分豊子ちゃん本人よりも上手だと思います」

手で輪っかを作り、おちんちんをシゴくような動きをする私の右手。確かに私には手コキの経験は殆どないけど、私よりも上手というあんまりな言い草に心はひどく傷つけられた。

「ではそろそろ落札者様に引き渡しますね。最後に、今までずっと一緒だった豊子ちゃんにお別れの挨拶をさせてあげましょう。＜右腕ちゃん、手を振って＞。……ほら、右腕ちゃんがバイバイってしてますよ？豊子ちゃんもちゃんとお別れの挨拶したらいかがです？」

私の右腕だったモノが私に向かって手を振っている。その右手の動きにつられるかのように私は、いつの間にか拘束が外されていた左手を振り返した。

（さようなら……私の右腕………………今までずっと一緒にいてくれて、いろんな動きを助けてくれてありがとう……ごめんね、バイバイ……）

とてもたくさんの大切な物を失ってしまった私。借金は全部返せて、命も助かったけど、これからどう生きていけばいいのだろう。
生き残れた少しの安堵と、これからの生活への大きな不安、それらが複雑にミックスされたものが今の私の感情だった……

第六話　エピローグ

悪夢のようなオークションから数日経って、私はまだオークション会場の中に閉じ込められている。社会的には私の右腕などは事故によって失われた扱いになるらしく、入院期間などの辻褄合わせも兼ねて、傷が完全に塞がるまでの一週間ほどは会場内の宿泊設備に監禁される事になっていた。

宿泊用の部屋はビジネスホテルの様になっていて、トイレや洗面台付きのユニットバスも完備されている。食事や着替えだってちゃんとしたものが毎日提供される。生活自体には不都合が無いそんな環境で、私は自分の身体と嫌でも向き合いながら日々を過ごしていた。

部屋のドアが開き、スタッフが今日の夕食を持ってくる。食欲をそそる匂いを漂わせながら差し出されたメニューは、見た目もとても美味しそうなパスタだった。

こんな状況、生活でも生きている限りお腹は減る。私は小さく「いただきます」と呟いて、用意されたフォークに＜右手＞を伸ばした。

（あっ……まただ、またやっちゃった…………もう私に右手は無いのに……）

手を伸ばしてから間違いに気付く。生まれてから今までずっと行ってきた習慣は数日で変えられる訳もなく、私は食事のたびに肩から少しだけの長さしか無い右腕を伸ばし、毎回喪失感に打ちのめされてしまう。

改めて左手でフォークを掴んで食事を始める。ぎこちない動きでフォークを操作し、なんとか麺を巻き取って口まで運ぶ。パスタの味

自体はちゃんと美味しいのだけれども、うまく食べられないもどかしさが右手を失った喪失感を強調するようで、食事の味を楽しむ事は難しかった。

「ごちそうさまでした」

右手があった頃の2倍ぐらいの時間をかけて、パスタを完食する。少し経つとスタッフがやってきて、食器を回収していった。

夕食が終わると、私は身体を清めるためにユニットバスへ向かう。傷口を濡らすのは駄目だと言われているので、髪だけをシャワーで洗い、顔や身体はお湯で湿らせたタオルで拭くことにしている。

簡単な作りの部屋着を全部脱ぎ、ショーツだけを身に着けた格好になる。服を脱ぎ、鏡に映る自分の姿はいつ見ても私を悲しくさせ、思わず涙が溢れてくる。

右腕は無く、自慢だったおっぱいもただの丸い傷口になってしまっている不格好な身体。おへソの下にある真っ直ぐな傷跡は、私が子供を作れない身体である事をはっきりと示している。それに今はショーツで隠されているけれども、その奥に本来存在するはずの割れ目だってもう今の私には付いていない。

(本当に惨めな身体になっちゃったなぁ……これから一生こんな身体で生きていくなんて………)

これからの人生で、この身体がもう二度と元に戻ることは無い。その現実の重さに押し潰されそうになりながら、私は身体を清めていく。

片手が普通に使えるのもあって、時間はかかっても髪を洗ったり身体を拭いたりすること自体は出来る。左腕を拭くのは確かに難しい

けれども、髪と同じくシャワーで流してしまえば大丈夫だった。
間違いなく不便ではあるけれども、こうやって生活自体は出来るという実績は、喪失感に押し潰されそうな私の心をほんの少しだけ軽くしてくれた。

――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――

一通り身体を清め終わった私には、服を着る前にもう一つやる事が残っている。その準備として私はショーツまでもを脱いで完全に全裸になり、事前にスタッフから渡されていた止血薬の入った瓶を取り出した。
私はこれから、身体を切り取られた傷口の部分にその薬を塗らなければいけない。薬を塗るためには当然ながら自分の欠損部位を自分で触る必要があるため、作業のたびに改めて身体の状態を再確認させられてしまう。
毎日行うようにと言われたこの作業は、間違いなく一日の中で最も憂鬱な時間だった。

左手で掬い取った軟膏状の薬を、まずは右腕の断面に塗りつける。
薬のお陰で断面を触っても痛みは無いのだけれども、感覚が無くなっている訳では無いため、むき出しの肉を触られているのがはっきりと分かってしまう。
普通なら絶対に触れられることのない腕の中身を触られる感触や、骨のゴリゴリした感触は単純に気持ち悪いし、触ることで右腕の先が無いことをより強く感じてしまって、私は喪失感に包まれていく。

（私の右腕、こんなに短くなっちゃったんだよね……………そういえば切り取られちゃった私の腕……今なにしてるんだろう……？ずっとおちんちん握らされてたりするのかな……）

傷口に薬を塗っていると、失ってしまった部分のその後についてを考えてしまう。考えても自分が辛くなるだけなのは分かっているけれど、自分の一部だったものを綺麗サッパリ忘れてしまうなんて私には出来なかった。

右腕が終わった後は胸に薬を塗っていく。
ふくよかな膨らみが跡形もなくなってしまった平坦な胸の傷口は、外周から少しずつ傷が治り始めていて、今は直径の半分くらいまでが塞がっている。しかし傷が塞がった部分は火傷跡の様な状態になっていて、決して元の皮膚やおっぱい自体が再生している訳ではない。
一生傷跡が残る事が確定してしまっているふたつの無惨な丸い傷口、その左側に私は薬を塗りつけていく。

（撫でてるとぺったんこになってるのがハッキリわかる…………こっちのおっぱいは壁飾りにされたんだよね……身体のパーツを部屋に飾るなんて悪趣味すぎる……）

本来は隠しておくべき女の子の象徴的な部分で、特に男の人に軽々しく見せるなんて事は絶対にしてはいけないおっぱい。それをわざわざ切り取った上で、部屋に飾ってコレクションするという落札者の異常性がただひたすらにおぞましかった。

左側の次は右側にも薬を塗る。
平らになってしまった右の傷跡を撫でている手の平は、もう右乳房

が存在しない現実を明確に私に伝えてくる。更に、今まで右乳房を左手で触る時には確実に腕に当たっていた左乳房の感触を感じない事も、おっぱいを両方失ってしまった喪失感に拍車をかけてしまう。

（右のおっぱいはお肉として食べられちゃったんだよね……料理されて、切り分けられて、噛み潰されて飲み込まれて…………ここだけは確実にもうこの世界に存在しないなんて……そんな……）

ここ以外の部位は切り取られてしまった後も、ちゃんと切り取られた時の形を保ったまま飾られたり使われたりしている。でも、食べられてしまった右のおっぱいだけは、もう完全にこの世から消えてしまった。

いつまでも好き勝手に使われ続ける悲しさと、完全に消えてしまう悲しさのどちらがマシだなんて比べられるはずは無い。すでに切り取られてしまったパーツなのだから、保存されていようが食べられていようが私にとってはどっちも変わらないんだとも思う。でも、食べられてしまった事に感じる喪失感は、他の部位とはまた少し違ったものであるのも嘘偽りのない事実なのだった。

両胸の後はおヘソの下にある縫合痕の番になる。割と丁寧に縫われているとはいっても、ちゃんと薬を塗っておいたほうが治りが早くなるし、痛みも感じなくて済むらしい。

色々と奪い取られ、更にその痕跡がくっきりと残ってしまっている私の身体の中でも、この部分の傷跡はそんなに目立っていない。縫合されている事もあって、時間が経つとともに傷跡は更に薄くなっていくとも聞かされている。それでもそんな目立たなさとは裏腹に、この部分の喪失は私の身体の中で、ある意味一番重要な機能の喪失を示す証拠になってしまっていた。

（子宮と卵巣が無いなんて女として間違いなく終わりだよね……子

孫も残せない生物に生きてる意味ってあるのかな……？）

別に何が何でも子供が欲しいと思っていた訳では無いし、そもそも相手だっていなかったしで出産について真剣に考えたことはなかった。それでもこうしてもう絶対に子供が作れない事を突きつけられてしまうと、女どころか人間という種族としての価値についてまで思考がおよび、生きる意味すらも揺らいでしまう。
勿論今の時代は子供を産まない選択肢だって普通にある事は知っているし、私自身も子宮が無い女は生きる価値が無いだなんていう考え方なんて持っていない。でも実際に、自分の生物としての根幹が抜き取られてしまったショックと喪失感は、そんなあり得ない考えを脳裏によぎらせてしまうほどに大きかった。
まぁ死ぬのはとても怖いし、まだどうにか生きていくことは出来るぐらいの手足は残っている以上、自殺するつもりは全然無いのだけれど。

最後に残った傷口は、股間にポッカリと空いてしまった大きな穴。
ここに薬を塗っている時が、一連の作業の中でも特に悲しみや惨めさなどを強く感じる最も憂鬱な時間になる。
腕やおっぱいや子宮や卵巣は、世間全体で見てしまえば、私以外にも事故や病気とかで失ってしまった人が存在している。ひどい言い方かもしれないけれども、ある種の仲間意識というか、この部位を欠損しているのは自分だけじゃないって考え方ができてしまう。でも、外性器や膣をこうやって丸ごとくり抜かれた人が私以外にいるとは思えない。
自分でも勝手な感情だと思うけれども、そんな孤独感が私をより憂鬱にさせていく。

（お股に手首まで入っちゃうの気持ち悪い……でも薬は塗らないといけないし………それに手首まで入れてるのに痛くも気持ち良く

も無いなんておかしいよ……もう一生気持ち良くなれないなんて嫌だ……イヤだ……）

自分の股間に手首まで挿入してしまっている違和感と、それが出来る身体になってしまった絶望感は何度経験しても慣れることはない。私の膣はかなり狭かったみたいで、数少ないセックスの時は毎回おちんちんを受け入れるのがとても大変だった。オナニーだっていつもクリトリスを使っていて膣を使った事は殆どなく、たまに挿入したとしても指は一本しか入れていなかった。
そんな私の股間も、今や手首すらもいとも容易く飲み込んでしまう上に、気持ち良くもなんとも無い。膣もクリトリスも無いから当たり前だけれども、もう二度と私は性的な快感を感じられなくなってしまったという現実はとても受け入れ難かった。

（私のおまんこ、オナホにされちゃったんだよね……もう私に付いてた頃よりもおちんちんを入れられた回数が多くなったかも………オナホにコンドームなんて使わないだろうし、生で中出しされちゃってるんだろうな……私も生の感覚とか知りたかったな……）

よせばいいのに私は切り取られたおまんこの今について考えて、落札者の男がおまんこオナホを使って自分のおちんちんをシゴいている光景を想像してしまう。
私ではついぞ知ることの出来なかった生のおちんちんや中出しの感覚をおまんこだけが経験していると思うと、ほんの僅かだけど羨望や嫉妬みたいな感情が浮かんできてしまった。

股間への薬を塗り終わり、メンタルをとんでもなく削られたこの作業からは解放される。でもまだ何日かは同じ作業を続けなければいけないことを思うと、私の気分は全然晴れない。
そんな重苦しい気分のまま、私は脱いでいたショーツや部屋着をま

た着ていった。

――

監禁生活最後の夜、私は今まで感じてこなかった感覚に襲われる。体温が上がって体が火照るような感覚や、全身がムズムズして我慢できなくなるような感覚。簡単にいってしまうと私はムラムラしていた。

（去勢されて卵巣が無くなってるのにムラムラすることってあるんだ……）

一度意識してしまったせいか、ムラムラがより明確になっていく。私の頭の中のイメージではすでに乳首もクリトリスも充血して勃ち上がり、刺激されるのを今か今かと待ち構えているように思えてしまう。
失われた手足が痛むという幻肢痛の話は聞いたことがあるけれど、もしかして乳首やクリトリスみたいな性感帯にも同じようなことが起きたりするのかもしれない。
我慢できなくなった私は服の中に左手を入れて、かつては乳首があった場所に手を伸ばす。
スカッ……スカッ……

当然私には乳首どころかおっぱいすらも存在しなくて、乳首を触ろうとした私の指は、服の中で虚しく空振るだけだった。

（ううぅ……乳首が切ないよぉ………なんで……？もう私にはおっぱいなんか無いのに、どうしてこんなに疼いてるの……？）

完全に塞がった胸の傷跡を撫でてみても、ザラザラとした感触が指に伝わってくるだけで全然気持ち良くなんてない。乳首をつまんだり、おっぱいを揉んだりしようといくら左手を動かしても、当たり前だけど柔らかいおっぱいの感触は一切感じられなかった。

発散出来ない疼きに突き動かされる様に、私の身体はオナニーをしようともがく。左手は胸への刺激を諦めてショーツの中へ向かい、脳内で勃起を続けるクリトリスを満足させようと指を伸ばしていく。ショーツの中に入った指は、下腹部の肌をなぞりながら下へ下へと降りる。オークションの時に剃られた後、また少しずつ生えてきている陰毛のジョリジョリとした感触を感じながら、私の指はゆっくりと進み続けた。

カクンッ！

進み続けた私の指はまるで崖から落ちるかのように、股間に空いた大穴の中に飲み込まれてしまう。穴の中をいくら触っても気持ち良くもなんともないけれど、オナニーを諦めることの出来ない私は、穴の奥までどんどんと左手を侵入させていった。

（ないっ！クリトリスも割れ目も膣も、おまんこが全部無いっ……！これじゃ全然気持ち良くなれないっ！！！）

穴の一番奥、もうこれ以上進めない行き止まりまで左手が到達して

も、結局微塵も気持ち良くない。それでもどうにかして刺激が欲しくて、穴の中で指を開いたり逆に握りこぶしを作ってグリグリと掻き回したりと左手をメチャクチャに動かしたけど、最後まで穴の中から快感が帰ってくることはなかった。

（はぁ……はぁぁっ……！何も感じない……気持ち良くないよ…………あうぅ……オナニーしたい！イキたいっっ！！お願い……私をイカせてぇぇぇぇっっ！！！）

もう私の身体には存在しない乳首やクリトリスや膣。そんなどうやっても刺激できない幻の性感帯からの＜気持ち良くなりたい＞という訴えを少しでも紛らわそうと、股間の大穴のフチを指でなぞる。そこは私に残っている肌の中ではおまんこに一番近い場所だからか多少は敏感で、触っているとくすぐったい様な感じはある。でもその感覚はあくまでくすぐったいってだけで、今の私にそれを快楽に変換する事は出来なかった。

考えられる限りの手を尽くしてもムラムラを全く発散出来なかった私に残された道は、何もしないでただ身体の疼きが収まるのを待つだけ。ベッドの中で身体を丸めて目をつむり、ただひたすら処理できない性欲に悶え続ける時間は、オークションの最中とはまた違う種類の地獄に違いなかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

私が完全に解放されてから3ヶ月が経った。
解放の時に散々脅された私にはオークションの事を告発する勇気なんてなく、事故によって右腕を失った可哀想な女として一人暮らしの自宅に引きこもりがちな日々を送っている。

3ヶ月もすると片腕だけでの生活も随分と慣れてしまい、日常の範囲であればあまり不自由なく生活できるようになっていた。お箸だって左手でどうにか使えるようになったし、物を掴む時に間違えて短くなった右手を差し出したりすることも無い。
色々と欠損してしまった惨めな身体だってある程度は見慣れてしまい、着替えやお風呂の時に泣いてしまう事もほとんどなくなった。
もちろん喪失感や悲しみが完全に無くなったわけでは無いので、ただ身体についてを考えない様にすることが上手くなっただけなのかもしれないけど。

でも、そんな今の私にも悩みはいくつかある。

一つ目は収入について。
借金は全てなくなったといっても今の私は無職であって、現状はオークションの時に受け取った100万円を切り崩しながら生活をしているだけ。
このままだといずれ生活が出来なくなってしまうのでどうにかして収入を確保しなければいけないけれども、片腕の私がちゃんと働けそうな仕事やバイトはなかなか見つからない。

二つ目は外出について。
引きこもっていると言っても、食料や日用品の買い物とかでどうしても外に出なければいけない事はある。
胸や股間の欠損部位は服を着れば周りに気付かれる事は無いけれど

も、右腕が無くてヒラヒラと揺れる袖だけはどうしても隠すことは出来ないから周囲の人の目が気になってしまう。
直接何かを言われることは無いけれども、私の腕が無いことに気づいた通行人のギョッとした反応を見てしまうたび、私の心は少しずつ憂鬱になっていく。色々と落ち着いたら形だけでも誤魔化せる様に義手を作ったほうが良いのかもしれない。

最後に性欲について。
監禁生活最後の夜に感じたような強烈なムラムラが、今でも月に一回程度の頻度で私に訪れる。そんな時は、気持ち良くなれないくせにいっちょ前に発情だけはするこの身体が恨めしいとまで思いながら、冷水のシャワーを頭から浴びて火照る身体を無理やりに冷ましている。
この欲求不満をちゃんと解決するためには、おまんこやおっぱい以外の新しい性感帯を開発するしか無いのだろう。幸いな事に無傷の状態で残っているお尻の穴、ここをちゃんと使えば今までと同じくらいに気持ち良くなれたりするのだろうか。

そんな色々な悩みはあるけれど、生きている限り日常は続いていくし、続けていかなければいけない。
まずはこれから生きていくためのお金を稼げるようになるため、私は今日も求人情報を検索していった。